

井手の小町伝説

——井手寺別当の妻をめぐって——

一

上井手の小町塚は、国鉄玉水駅から東北へ歩いて二十分くらい
所にある。玉津岡神社（旧春日社）の参道の右手に大きな自然石を
四つ重ねた堂々たるものである。この小町塚は、小野氏の所領や謡
曲の小町伝説とも無縁で、どうしてこの地に存在するのかが疑問の
はじまりであった。

井手は橘氏の旧領で小野氏と同じく祖を敏達帝とすること、仁明
帝の母が橘嘉智子ということ、小町が『古今集』で贈答（七八二・
七八三）している小野貞樹が、橘氏の一族と言われていることなど
があげられるが、これだけでは小町と井手との結びつきは弱い。

井手と小町を結びつける材料が三つある。一つは『小町集』流布
本、六二の山吹の歌。一つは『冷泉家流伊勢物語抄』に小町が「井

井手の小町伝説

明川忠夫

手寺の別当の妻として……（中略）六十九にて彼井手寺にてそした
りといへり」とある冷泉家日記。一つは『山城国井提郷旧地全図』^卒
①



上井手の小町塚

(以下「井堤旧地全圖と略す」)に大姉墳小野小町墓、井堤下紐旧跡、小町墳地蔵が描かれていることである。これらを考えていく中で、小町塚がなぜ存在するのか、なぜ井手寺別当の妻となるのかを模索してみた。

一一

井手と小町を結びつける歌としていつもあげられるのは、小町の山吹の歌である。

色も香もなつかしきかな蛙鳴く井手のわたりの山吹の花

『小町集』に記載されているが、『古今集』にはない。従って後述するように、小町の歌かどうかは疑問である。しかし、小町なら詠みそうな歌なのである。

小町の歌と断定できる『古今集』の十八首の歌をみていくと、小町は現実の諸相を「うつろふもの」「はかないもの」「むなしくなるもの」として扱っている。「あはれてふ」(九三九)の歌などで見ると、男性遍歴の末に扱えた詠嘆的な無常感になるようである。が、こうした扱え方から推定すると、小町が都から離れた井手の山里にあこがれて、晩年、住んだとする伝説や尼になったとする伝説が生まれても、不思議ではないからである。『古今集』に

九四四 山里はもののわびしきことこそあれ世の憂きよりは住み

よかりけり

二〇五 ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし
また『小町集』に

一〇 山里のあれたる宿を照らしつつ幾夜経ぬらむ秋の月影

とある。井手の山吹の歌も、山里へのあこがれの歌の一つとして見られないであろうか。

井手は「山吹」や「蛙」の枕詞になるほど平安時代に多く歌われている。『古今集』に

一二五 かはづ鳴く井手の山吹散りにけり花のさかりにあはまし
ものを

『貫之集』に

音にきく井手の山吹見つれども蛙の声は変らざりけり

都から奈良への途次にある井手の山里が、なぜこれほど詠まれたのであろうか。山吹や蛙が井手の名所だったからだろうか。それもあるが、当時の中・下級貴族たちの山里へのあこがれがあることである。

かつて律令体制の中核の場で活躍した貴族たちは、今や藤原氏の台頭によって、体制の外側におかれている。体制の軌道から離れた中・下流貴族が、『古今集』の歌人に多いことは示唆的である。橘氏、紀氏をはじめとする貴族たちが、「階級的、社会的不安」から

「世の憂き時」(九五〇)を自覚し、次第に心のよりどころとして、山里へのあこがれをもったとしても不思議ではない。小町もまた、その一人であつたらう。

井手は橘氏の本拠のあつたところで、純粹の意味の山里ではない。しかし、井手は藤原氏に亡ぼされた橘諸兄、奈良麻呂の旧地として、古今の歌人たちは心情的にひかれるものがあつたに違いない。橘嘉智子が嵯峨帝の妃となつて、いくぶん橘氏は勢力を盛りかえしたとしても、橘氏は政治の中枢の場で再び活躍はできなかったのである。

山吹の歌の小町らしさは、この歌の解釈の仕方にある。

この歌は二句切れ倒置法の歌で、歌意は平易である。『古今集』の小町十八首の歌と比べると、小町らしさが外へですぎている。らしさとは、わが身をふりかえつたような眺め方が、上の句にある点である。「わが身世にふる」(一一三)「わが身時雨」(七八二)「わが身むなしく」(八二二)等のように、己を客観的に眺めることができる、わが身である。また山吹の歌は、夢の連作六首に見られるような純粹な若い歌ではない。やはり、かつて見た美しい山吹の花を久しぶりに見たという感じがする。その意味で晩年に詠んだと思われる「花の色は」(一一三)に似ている。即ち、山吹の花を見ていると、昔の色香ただよう我身がなつかしいという回想にも詠みとれる。自然を主として素直に鑑賞すべきかも知れないが、古今十八首の

恋の歌の多さ、歌の背後に隠れ見える男の姿から行けば、「花の色は」の「花」をどう見るかと同じく、素直に自然の回想をしたとも思えないのである。案外、「花の色は」にヒントを得て、井手の山吹を誰かがつくつたのではなからうか。

この歌の出典は、一〇八六年成立の『後拾遺集』で『古今集』ではない。片桐洋一氏は『小野小町追跡』の中で、『小町集』の流布本と異本とを照合させ、『小町集』の生成を説いておられる。それによると、『小町集』から『古今集』の小町の歌が選ばれたのではなく、『古今集』から『小町集』が編集され、五段階にわたつて増補、膨脹してきたとまとめられる。山吹の歌は第二段階に入ることが、「小野小町の歌であるとも断定できぬ歌」の一つとしてあげておられる。小町の歌かどうかかわからないとすると、いったれが詠んだのであろうか。

井手寺別当の妻として小町が居たとする伝説の背景を次に考えて見たい。

三

『冷泉家流伊勢物語抄』は鎌倉時代のものらしく、家日記は冷泉為定が書いたとされている。この本は『伊勢物語』の注釈本であるが、『伊勢物語』六十二段の登場人物を在原業平、小野小町、大江

惟章、仁明帝皇子基蔭親王にあてて解説している。即ち、親王没後、小町は尼になり「井手寺べったうのつまとなりて、山しなに住けり」というのである。後、一問一答の形式で次の文が書かれている。

とう、大師の玉造ゴウゾウを見るに、小町衰弊ウヰの後相坂の辺に住けるを大師御らんじて、其すがたをあそばたれりと見へたり。爰に井手寺の別当の妻と成て、すいウヰへの所不見。相違如何

答て言、家の日記言、小町せき寺に住る事みへず。六十九にて彼井出寺にてそしたりといへり。されば大師只小町が好色にすつれたりしかば、かゝるいみじきものもおとろへはつる事ありといふ事を人に知せんとて、(小町によせて大師かかれたり。宇治殿物には)小町はばとう馬頭くわんおんの観音けしん也。いで寺にて死といふ事は一旦の事歟。其後すいへいして相坂の辺にてかばねをさらすと見へたり。……(以下略)

(片桐洋一『伊勢物語の研究』資料篇)

この問答には事実の誤りがあるが、それはさておき、この頃に逢坂関寺に小町が住んでいたこと、小町が別当の妻となつて衰弊していた伝説があったらしいことが推定される。関寺の小町とか、小町は馬頭観音の化身などの伝説は、「小町草子」や謡曲「関寺小町」で推定できるが、井手寺別当の妻の小町伝説の記録は、いろいろ調

べて見たが何も残っていない。この注釈書の記録があるだけである。また、井手寺別当の妻について後世論じたものはなく、『謡曲拾葉抄』『光広卿百人一首抄』は、この説をそのまま引用、または踏襲している。

井手寺は、橘諸兄が梅宮の神宮寺として建立した氏寺であつたらしい。いつ建立され、いつ廃寺になつたかの公的記録はない。とくに井手町は昭和二十八年の水害によつて、殆んど古文書が流失している。梅原末治氏の井手寺史蹟調査によると、礎石、古瓦から井手寺の盛んだつた頃は、奈良時代と思われること。古銭(延暦十五年の隆平永宝)古鏡は、堂宇の建築にあつた地鎮の意味で埋蔵されたと思われることから、平安時代に引続いて井手寺が存在したこと。廃寺は礎石が火災にかかっていると、井手寺の歴史は橘氏の盛衰と合致すること等があげられている。

また氏は、『伊呂波字類抄』梅宮の未社の条に「山城国井手寺内」とあるのに注目し、続いて記載されている譜牒男卷下の

太后氏神祭於圓提寺。此神始……(印筆者以下同じ。)の圓提寺を井手寺とされている。太后とは檀林皇后、氏神とは梅宮、即ち橘氏の氏神のことである。

ここで、『伊呂波字類抄』をのぞく、井手寺、円提寺について記載されている文献をあげておくと

(1) 『高野春秋』延喜十六年(九一六)に高野山金剛峯寺の座主が、山州圓提寺に逃れた文書。

(2) 『平安遺文』天喜四年(一〇五六)永久三年(一一一五)永万年(一一六五)などに、山城国玉井荘……井手寺、または、山城国玉井荘……圓提寺とある文書。^⑦

(3) 『北野神社古文書』嘉暦元年(一一二六)社領山城国石垣荘と圓提寺の争いの文書。

(4) 『興福寺官務牒疏』嘉吉元年(一一四一)井堤寺は綴喜郡井堤町にありとある文書。

井手寺と円提寺は、同一の寺かどうか意見のわかれるところであるが、胡口靖夫氏は『平安遺文』の同一荘園、同一内容で、日付の接近している文書二通(八一二号^圓提寺^/八一三号^井手寺^)を含めて多角的に検討され、同一寺院と考えるのが妥当とされている。

地元では、現在の井提寺故社の石碑より東方、約二〇〇余の所をドノウエ(堂の上?)と呼び、円提寺跡とも伝えている。そうすると、井手寺と円提寺は別々のお寺のように思われるが、『井提旧地全図』によれば、現在の井提寺故址より東北に井提寺が描かれている。円提寺跡と言われる所も、描かれた井提寺の境内に入ってしまうことになるので、ドノウエは、井手寺の伽藍の一角を占めるお堂

のことと思われる。また、この絵図に円提寺の記載もないので、同一のお寺のようである。

円提寺、井手寺(圓提寺)どちらの漢字が正しいのか古いのかわからないが、「e」から「i」、「i」から「e」に音韻変化する例は方言に多いので、両者が混同することは多かったと思われる。

井手寺、円提寺を同一寺院とすると、いつ頃まで存在したのか。室町時代に井提寺は興福寺の末寺になったようであるが、胡口氏によると、資料(4)以降の興福寺関係の書物(江戸時代)に井提寺の記載はないので、室町時代まで井提寺はあったこと。また、井手寺の完成は、天平十二年(七四〇)の聖武天皇の井手行幸の頃と言われている。従って、井手寺は、奈良時代から室町時代まで存在していたことになる。

また、井手寺に別当が居たことは、『平安遺文』八一二号に「圓提寺別当」一八二七号に「井手寺別当」とあるのでわかる。

四

以上から井手寺は小町生存の時代、また冷泉為定の晩年期(一一三〇〇年代)にも存在していたことになるので、「井手寺別当の妻」は、単なる作り話とは思われない。かといって、真の小町かという点、後述する土壌からは考えられないのである。

別当の妻の「別当」とは、本来、座主につぐ寺の長官という意味だが、『今昔物語』によると、いろいろな別当が居たことになる。

「形、僧なりといへども心邪見にして……つねに遊女、傀儡を集めて歌い嘲る」（19の22）妻ある別当の話（17の25・20の34）もあるので、当時の別当は半僧半俗と見てよいだろう。この別当の妻が、例えば比丘尼を含む遊行女婦の自称小町なら、次に述べる別所との関連から、小町が「井手寺別当の妻」ではないとは言いが切れないだろう。

上井手、小町塚のすぐ後ろに中坊家がある。親子三代にわたって、小町塚を自主的に管理なさってきた家である。三代目の中坊信太郎氏（明38年生）が語る小町伝説は

- 。小町は、室町時代の人やと昔から聞いている。
- 。小町は、深草の少将が通ってきた九十九日めに山科から姿を消し、諸兄公を慕ってここに来はった。

。小町は、このホウガン堂に住んだはったが、六十九歳で死なはった。ホウガン堂の跡にあるのが、今の小町塚や。

。小町塚のあたりは、たくさんのお寺があったところや、名前をあげると、テンキ坊、ナカ坊、ショウ坊、アンゲン坊、ヒガシ坊、れんだいじ、えいふくじ、つりがね堂など二十坊ほどになる。

。今でもあちこちに石がごろごろしてるのは、その跡や。テンキ坊の井戸は今もある。

。それらは、すべて清盛が焼いたと言うこつちや。^{トツ}

これらのお寺の内、古文書などで確認できるのは、連台寺、永福寺で、他はおよその場所がわかってる程度である。注目したいのは「じ」でなく「坊」である。中坊氏の二十坊ほどの話は作りごとではない。『山城名跡巡行志』第六春日神祠、今の玉津岡神社の説明に

此所在^三伽藍跡、又寺跡有^三所^一。……（中略）……此寺跡不^レ詳寺号^レ亡^レ亡。

とあるからである。『井提旧地全図』にも、玉岡峯（井提山）に阿元坊、本願坊（玉岡堂とも）と記載されているので、これらも二十坊の内の一つだと思われる。井手は現在でも八つのお寺があつて多いが、明治九年一月の廃寺の記録を見ると六寺に達する。

これは井手の周辺にかつて何かがあり、多くの聖たちが住みついていたのではなかったか。五来重氏は「中世末期から近世初頭にかけて、村落にあつた小堂や小庵への遊行聖の定着がはじまり、今日のように部落や字ごとの寺院ができるようになる。」と云われている。

ナカ坊、ショウ坊、ヒガシ坊をはじめとする二十坊ほどの名前も、

大寺の宿坊といったものではなく、坊さんの人名ではなかったか。例えば別所の跡ではなかったか。宿坊となるには、よほどの大寺で、多くの庶民の参詣がなければ考えられないし、大寺なら記録や伝承に残るべきものと思われる。

南山城の別所といえば、井手石垣の南、綺田にあった東大寺系の光明山別所が有名である。長元六年（一〇三三）頃に開かれた、院成期の南都系浄土教の中心地で、他宗の人々も多く隠棲したという^④。有名な信西入道の子の明遍、平実親の子の心覚が著明である。この光明山寺には北別所があったらしく、『山州名跡巡行誌』に別所の地名が残っている。その場所は、小町塚より東の田村新田よりで、有王伝説があったところである。中和東にも光明山寺の奥別所があったらしく、ここにも別所の地名が残っている。中和東、井手、石垣、綺田を点々として別所^⑤があったようである。

別所に妻子をおくことは『発心集』（1の11）に見える。五来重氏によれば、妻帯の供僧というものが高野天野にあり、桜本坊、奥の坊、沢の坊等の名前があったという。

井手の二十坊ほどの名前も、およその見当がつくのではなからうか。先の妻ある別当の僧と大差はないのである。聖と女性との関わりは、聖の勸進性、唱導性、遊行性、世俗性等の聖の定義^⑥から、じゅうぶん推定できる。巫女、比丘尼等の遊行女婦とのつきあいなく

して、聖は考えられない。「諸国の伝承の根拠地は、いつも変わらずに聖と女とのかかわりが認められる。初期の聖と遊女との関係は、そのまま中世の遊行上人と歌比丘尼との関係に移っていたようである」^⑦。

小町が、井手寺別当の妻かどうかはともかく、別所が井手にあったとすれば、大津の逢坂と同様に自称小町が生まれうる土壌は、考えられるのである。

五

光明山別所の中心人物、明遍が回国した別所が各地にあるが、これを明遍系別所と呼んでいる。この別所からは、平家物語にまつわる有王伝説が流布している。『雍州府志』（貞享元年（一六八五）によると、井手の田村新田にも俊寛屋敷と有王の宅跡があった。諸兄の曾孫、有主がここに住んでいたので、有主と有王が結びついたらしいといわれている。今は、有王伝説は伝っていないが、田村新田には有王山、有王分校などの小字名で残っている。森島幸夫氏（大13生）によると、この土地は有王が古くから開いた所で、田村新田は元禄十五年頃になってからの地名という。

有王は高野聖となって遊行するが、成経、康頼につよい熊野信仰の反映が見られる。明遍系伝説とは言いながら、時宗聖とかかわ

た熊野系の伝説かも知れない。

さらに井手には、小野系の伝説、黄金伝説が伝わっている。中坊信太郎氏によると、

。諸兄公が支那から山吹と金の鶏をもろうて帰ってきた。

。井手寺が攻められた時、坊さんが金の鶏のありかを云わんか

つたら殺すぞと脅かされ、暗号みたいな歌を詠んだ

。朝日のあたる夕日のあたる紅の藤のかぶだ

。井手寺は焼けてしもうて、金の鶏はどこへ行つたかわからん。

何でも大和の国のどこかへ行つたあると言うことや
行ッテイル

同じ話も中坊秀雄氏（明43生）によると、諸兄公の館の鬼瓦にあたる部分に金の鶏の瓦があった。橘氏が亡ぼされる時に金の鶏を埋めた。歌は、朝日さす夕日さすところに埋めおく黄金の鶏^⑩で、そのしるしに紅の藤を植えておくという。

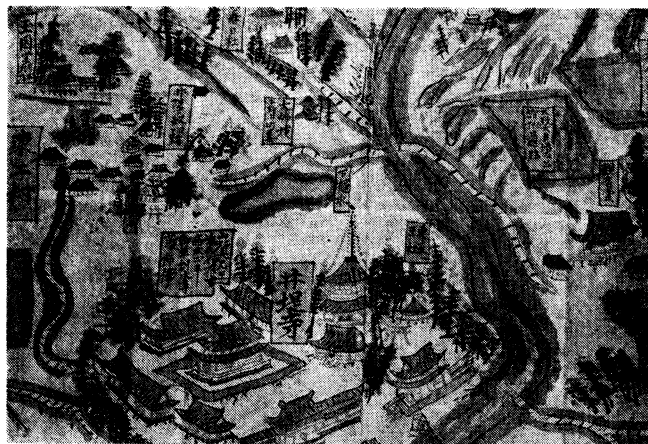
この伝説は、金の鶏伝説というより朝日長者伝説として、全国に流布しているものである。歌も「朝日と夕日」それに紅の藤のように「ありかを示すところ」が詠まれているのが特徴である。朝日長者伝説で有名なのは、日光二荒山神社の伝説^⑪である。男体山は有宇中将、女体山は朝日長者の娘、太郎山は子ども馬王、馬王の子が小野猿丸という。つまりこの伝説は「奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の」の猿丸伝説と関わっており、小野神系の語りとなつてつながつているよう

である。またこの伝説の伝播者は、聖と遊女が考えられている^⑫。

つまり、井手には、小町伝説、金鶏伝説という小野系のもと、有王伝説の明遍系、または熊野系のものであったらしいということになる。どちらも、聖、遊行女婦と無関係ではなく、井出の小町伝説を生まれ易く

している。

明遍系聖の別所と小町伝説とのつながりは、京都の小野随心院、同じく深草の欣浄寺の小町遺跡や伝説から推定される。深草大亀谷や随心院の西にある勸修寺裏山の松影山には、明遍系の聖がたくさ^⑬ん居たという。



小野小町墓と下紐旧跡 「井提卿旧地全図」より

「深草」の少将が「小野」の小町へ百夜通いする伝説は、深草と山科を行ききする聖の中で生まれたのではなかったかと思われる。^⑧

六

今まで井手の小町伝説が生まれる可能性について論じてきたが、井手の小町伝説の原型はどんなものであったのだろうか。その一つのヒントを与えてくれるのは、『井提旧地全図』である。この絵図の井提寺の北に小町塚と井提下紐旧跡が並んで描かれているが、これは偶然に並んだものであろうか。

『伊勢物語』一二二段を見ると次の話がある。

むかし、男、契れることあやまれる人心変リシタ女ニに

山城の井手の玉水手にむすびたのみしかひもなき世なりけりスクツテ飲ミ

といひやれど、いらへもせず答

この中の「あやまれる人」を先の『冷泉家流伊勢物語抄』は、染殿后または四条后としているが、同時代の『和歌知頭抄』は小町にあてているのである。その他の伊勢の段を調べて見ると『冷泉家流伊勢物語抄』の方が、小町にあてて一貫性がなく、『和歌知頭抄』の方がすっきりしている。しかし、共通して言えることは、『伊勢物語』の色好みの女を小町にあてはめる考えである。これは妻の貞操が問題になってくる中世の世相の反映で、単に歌学者のみの意見

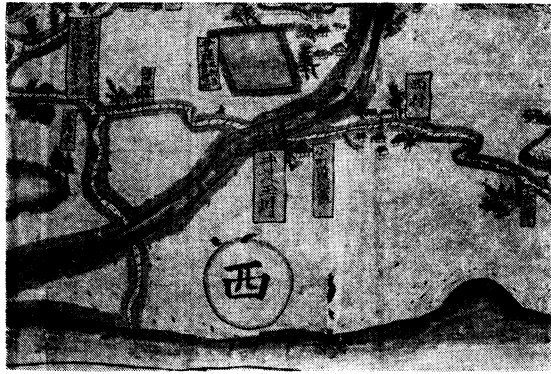
ではないだろう。

とくに、一二二段を小町とするかどうかは、その内容によるものと考えられる。それは、一二二段に『大和物語』一六九段の下帯伝説をおぎなって考えるかどうかの違いにも、通ずると思われる。一六九段の要旨は、

内舎人で色好みの男が大三轮神社の御弊使として大和へ下った。途次、井出に六、七歳の美しい少女に出会う。あまりに美しいので、成人したら私と結婚してほしいといって形見に帯をとらせ、男も少女の帯をうけとる。少女は成人しても約束を覚えていた。七、八年たって男は同じ使いで井手に泊った。前に井戸があり、男に成人した女（水汲み女）がいうには……

で中断している。中断して歌の記載がないので、同じ井手を舞台にした伊勢の一二二段を後半にくっつけて、一話としたものである。この二つを結びつけて考える説は、古くからあり、現在にまで続いている。^⑨

この下帯伝説は、内舎人が井手にゆかりの橘諸兄の孫、清友として描かれること（『雲玉和歌抄』〈室町時代〉謡曲「玉水」）があっても、女は小町とならなかった。『未刊謡曲集』で小町題材のものを検討したが、いずれも井手を舞台にしていない。この理由は、美しい少女と好色の小町では話として飛躍があり、発展性がなかった



小町墳地蔵 ⑤の下は木津川 「井提郷旧地全図」より

ためと思われる。
この二つが結びつかなかつたがために、中世の

小町の好色伝説と清友の下帯伝説が、聖などによって語られてきたのではなかったか。黒岩涙香は、井手村にかつて玉章地蔵堂が安置されていたこと、その地蔵堂は小野お通が再興したとの話を記載している。玉章地蔵は、小町地蔵、小町文張地蔵ともいい、小町に寄せられる

た恋文で罪障消滅のため、作られたという。これは小町橋慢伝説が背景をなすものだが、美人を核にして好色にすりかわる性質のものである。

さらに、各地の小町伝説の原型の多くは、好色放浪のものが多いため、一つの証となるだろう。

黒岩涙香のいう玉章地蔵堂は、その痕跡すら井手に伝っていない。

が「井提旧地全図」によると、井手の中道に沿う、西村という所に小町墳地蔵という地蔵堂が描かれているので、ひよっとすると、これにあたるのかも知れない。

下帯伝説は、有名だったらしく、多くの歌や書物に引用されている。有名なあまりに井手との関係から、内舎人が清友にすり変って伝説化したらしい。それにしても、どうして小町塚と下帯伝説が並んで描かれているのか。それは、伊勢一二二段と大和一六九段を別々の話として、誰かが語ったものでなかったか。即ち、すでに述べたように、小町と清友の話として語られて来たのではなかったか。そのくせ、話は一つとして考えられる要素も持っているのが、並んだ理由かも知れない。

また、昔の大和街道は井手の東の山麓に沿ってあったらしい。森島幸夫、中坊亀太郎（明25年生）両氏によると、その道は現在の多賀の町をはずれたあたりから東南に入り、小町塚のすぐ南の地蔵辻池の東の畦道を通って、南の浄水場の方へ行くのがそうだという。

井提の中道と同じ道ではない。市原野、逢坂、山科小野の小町伝説が、街道沿いに生まれているように、多くの人々が通る街道筋には、遺跡が生まれ易いのである。小町塚の東の左り馬の遺跡は、かつて多くの女性が女芸上達のため、お参りした所であり、さらに東に足をのばせば有王の遺跡があったはずである。

小町好色伝説と清友の下帯伝説を語る聖か比丘尼が、街道筋にこの二つの遺跡を生み出したのではなかったか。「色も香もなつかしきかな」と遊行女婦が自らの過去を小町に託して語ったなら、井手寺別当の妻はありうるのである。

井手に好色の小町伝説があったとするなら、どうして現在に伝わっていないのだろうか。それは、おそらく小町が諸兄公を慕って山科から井手へ来られたと語られているからであろう。諸兄公は井手の人にとって、今も尊敬される「公」であり、井手の人々の中に生きているのである。諸兄公に好色の小町では困るのであるか。『井提旧地全図』には、大姉の墳、小野小町墓として描かれている。さらに、井手は、勧修寺、仙洞御所、大宮御所の所領として皇室との縁が深かったところである。

中坊信太郎氏は、小町の墓は天皇の御陵といっしよで、これにさわったら徴役へいかならんと言われる。小町は諸兄公を慕ってきた貴族の娘として、今も大切にされている。

小町塚は、かつて五輪塔であったようだが、自然石に変っている。この自然石は光明寺の礎石を積んだものという。光明寺は井手寺の法名とも言われているので、小町は、井手寺の礎石を墓石にしても良かったことになる。井手寺別当の妻の小町として、これほどふさわしいものはないだろう。

① 横田平次氏蔵。この絵図は、東大寺絵所法橋俊秀が康治二年（一一四三）に描いたものを、嘉暦元年（一二三〇）享和三年（一八〇三）の二度にわたって、模写されたものである。従って真偽のほどは確かめがたいが、他の資料と重ね合わすことよって生かされる大切な資料である。

② 拙稿「小町伝説の母胎―古今集―」『同志社国文学』第十四号。

③ 小沢正夫氏『古今集』小学館古典文学全集解説。

④ 大江惟章、基蔭親王は実在の人物ではない。

⑤ 例えは、文中の「玉造」即ち「玉造小町装衰書」には、逢坂の記述はない。

⑥ 『京都府史蹟勝地調査会報告』の第四冊所収「山城綴喜郡井手寺の遺跡―または『歴史と地理』大正十二年四月。

⑦ 『平安遺文』八〇五、八〇六、八一七、八一三、一一六五、一八二七などの各号。

⑧ 圓提寺の木津町鹿背山説、井手説を含めて「橋氏の氏神梅宮神社の創祀者と遷座地」『国学院雑誌』昭和五二年八月号参照。

⑨ 金田一京助氏『国語音韻論』によるとエマ（ A ） \wedge 東北 \vee エバル（ 威 張る） \wedge 関東 \vee ベックリ（びっくり） \wedge 関西 \vee 逆に、飴（ アミ ） \wedge 九州 \vee おまえ（オマイ） \wedge 関東 \vee などがある。

⑩ 注⑧と同じ。

⑪ 森島幸夫氏蔵『山城国綴喜郡之内鄉村高帳』『普譚御願』に連台寺の記載。井手寺故址に置かれている灯籠に永福寺と緑刻されている。これによると、連台寺は今の阿弥陀寺の下にあった。

⑫ 横田平次氏蔵『井手村誌』に正法寺、連台寺、観音寺、真成院、玉井寺、東福寺とある。

⑬ 『高野聖』三五頁。

⑭ 井上光貞氏『拾遺往生伝』補注、岩波思想大系。

- ⑮ 菊地山哉氏『別所と特殊部落』一七二～一七三頁。
 注⑬と同じ。二九～四七頁。
- ⑯ 大島建彦氏『お伽草子と民間文芸』一四二頁。
- ⑰ 尾島利雄氏編著『下野の伝説』一〇七～一六頁。
- ⑱ 稲田浩二氏他『日本昔話辞典』長者屋敷の項。
 注⑬と同じ。二二六頁。
- ⑳ 拙稿「山城の小町伝説」『民間伝承集成』五。
- ㉑ 古くは『伊勢物語闕疑抄』『宗長問書』などがあり、現在では南波浩先生『竹取物語、伊勢物語』日本古典全書。
- ㉒ 『小野小町論』二二八頁。
- ㉓ 私の調査では、薬師靈驗譚の小町伝説にとくに多い。例えば松山、米沢、福知山では、悪い病気にかかった色比丘尼が、村にやってきた形跡が多い。しかし、どの伝説地でもその部分は欠落し、貴族の娘小野小町が信仰した薬師さまとして、庶民の中に生きている。
- ㉔ 『都名所図会』巻五にも「古の道は東にして井提里を通りしなり。」とある。
- ㉕ 井提の中道は、大和街道から井出里を通る路であったという。桜井治男氏「井手の文学あれこれ」井手町史シリーズ第二集『日本文学にあらわれた井手町』一三九～一四八頁。
- ㉖ 注⑳と同じ。
- ㉗ 左り馬は、地元ではジョウサンノ神様の馬と呼び、水の神と伝える。大坂などから芸者を含めお参りがあったという。この芸者が、遊女から比丘尼へつながるのかどうか、今のところ不明。
- ㉘ 横田平次氏蔵『印鑑帳』（文政八年）森島幸夫氏蔵『山城国綴喜郡之内郷村高帳』（天保三年）。
- ㉙ 『大日本地名辞典』井手寺址の条、竹村俊則氏『新撰京都名所図会』

六。

〔付記〕

本稿を書くにあたっては、井手町の横田平次、中坊信太郎、中坊秀雄、中坊亀太郎の諸氏、それに、当時、井手町役場におられた森島幸夫部長、今もおられる村田名良夫氏等に、いろいろご教示、ご協力をいただきました。とくに、横田平次氏、森島幸夫氏には、終始お世話になりました。お礼を申し上げます。

なお、小稿は拙稿「山城の小町伝説」（注⑳）の井出の項を補うかたちで書いたものです。